

日本の出品にみるフィラデルフィア万国博覧会と ウィーン万国博覧会の関連

坂本 久子

Relationship of the Japanese Attendances and Exhibits between Philadelphia International Exhibition of 1876 and Vienna World Exhibition of 1873

Hisako Sakamoto

Abstract

Just 3 years before the Philadelphia International Exhibition of 1876, the Vienna World Exhibition of 1873 was held, which was the first Exhibition attended by the Meiji Japanese Government. There was a geographic difference between the Vienna World Exhibition in Europe and the Philadelphia International Exhibition in the United States of America. However, attendance by the Meiji Japanese Government seemed to have the same consciousness of these Exhibitions abroad. So, it seemed there was much relationship between both Exhibitions.

This report considers these relationships through the commissioners of both Exhibitions, the attendants who visited, the activities at both places, and the foundation of the first trading company, Kiri-Kosho-Kuwaisha. It also examines Japanese buildings which were erected at both Exhibition sites, which were designed and built by same master carpenter, Ebe Matsuo. These factors show us there was much inheritance between both sites. It also mentions the sinking of the Neil in the sea of Izu, and the subsequent studies of advanced Western technology by Japanese students during and after the Vienna World Exhibition. These affairs are later related with the Philadelphia International Exhibition.

Key Words: Centennial Exhibition, Vienna World Exhibition of 1873, Inheritance between the two Exhibitions

1. はじめに

1876年のフィラデルフィア万国博覧会が開催される僅か3年前に開催されたのが、1873年のウィーン万国博覧会である。この万国博覧会は、明治になって日本の政府が参加した最初の万国博覧会であった。従って、ウィーン万国博覧会の経験は、フィラデルフィア万国博覧会にも生かされ継承されていったのではないかと考えられる。

ウィーン万国博覧会はヨーロッパで開催され、フィラデルフィア万国博覧会はアメリカ合衆国で開催されたという地理的な違いはあるが、海外における先進欧米諸国での日本の参加という点においては意識的な相違はみられなかったのではないかという推測のもとに両者の万国博覧会での継承連続性について、いくつかの出来事を通して考察してゆく。

また、表1は、19世紀後半における主要な万国博覧会と日本の出品との関係を概略的に示したものである¹⁾。これを見ると1862年のロンドン万国博覧会までは、日本を知る外国人の手により日本の品々が紹介され出品されている。

1867年のパリ万国博覧会で日本が最初に参加し日本の品々が日本人の手によって展示されたが、ここでは幕府を中心に、薩摩藩、佐賀藩そして民間の商人も加わって出品²⁾していた。そして、ウィーン万国博覧会においては、明治政府として一体となった参加がおこなわれたのである。

「ジャポニズムのパリにおける盛行を促した大きな動因として、1867年のパリ万国博と、それからほぼ10年を経て開催された1878年のパリ万国博への日本の参加があったことは、すで

表1 主要な万国博覧会と日本の出品との関係（20世紀初頭まで）

年 代	万 国 博 覧 会 名	特 記 事 項
1851 年	ロンドン万国博覧会	オランダの F. ゼーヘルズ商会が日本の屏風を出品。
1853 年	ニューヨーク世界博覧会	オランダからの展示品に日本の品物が含まれていた。
1855 年	パリ万国博覧会	オランダ展示部門に日本の品物 80 点が含まれていた。
1862 年	ロンドン万国博覧会	ラザフォード・オールコック、神奈川英国領事ハワード・ワイズ大尉が日本の品々 614 点を出品。
1867 年	パリ万国博覧会	幕府と薩摩藩、佐賀藩が参加。徳川昭武を正使とする使節団が渡仏。
1873 年	ウィーン万国博覧会	日本は名古屋城の金鯰、鎌倉の大仏の模型、天王寺の五重塔などを出品。
1876 年	フィラデルフィア万国博覧会	日本は前例のない大きな規模で参加。
1878 年	パリ万国博覧会	日本の美術工芸品が注目され、ヨーロッパの工芸品にジャポニズム的傾向が強まった。
1889 年	パリ万国博覧会	日本の展示には特に注目すべきものはない。
1893 年	シカゴ万国博覧会	日本は平等院鳳凰堂を模した建物などを建設。
1900 年	パリ万国博覧会	事務官林忠正は古美術展を開催し、日本の職人に建物、茶室、庭園などを作らせる。
1904 年	セントルイス万国博覧会	日本は金閣寺や京都御所の紫宸殿も模した建物を配した日本庭園を展示。

* ジャポニズム学会編「ジャポニズム入門」、吉田光那編「図説万国博覧会史」より抜粋

表3 澳國博覽會派遣副總裁書記官并隨行員職務分担人表
及び澳國博覽會隨行御雇外國職務分担人員表

[illegible]

* 澳國博覽會參同紀要－付録－より

一方、フィラデルフィア万国博覧会については、「米國博覧會報告書－第二－」に、「米國費府博覧會委員人名表」⁶⁾と「米國博覧會渡航人名表」⁷⁾とが記載されており、この万国博覧会に関わった人、アメリカの現地に赴いた人を知ることができる。これらの人々を示したものが表4と表5である。総裁は大久保利通、副総裁は西郷従道が務めているが、渡航人名表の中には大久保利通の名前はみえない。

両者の名表を見ると、ウィーン万国博覧会とフィラデルフィア万国博覧会の双方の万国博覧会に赴いた人が分る。それは次の人々である。

田中芳男、關澤明清、鹽田眞、石田為武、朝日升、松尾伊兵衛、宮城忠左衛門、納富介次郎、松尾儀助、若井兼三郎、中野留吉、ドクトル・ゴットフレー・ワグネル。

表4 米國費府博覧會委員人名表

委員 大久保利通 総裁 西郷従道 副総裁 田中芳男 委員 關澤明清 委員 鹽田眞 委員 石田為武 委員 朝日升 委員 松尾伊兵衛 委員 宮城忠左衛門 委員 納富介次郎 委員 松尾儀助 委員 若井兼三郎 委員 中野留吉 委員 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル 委員	委員 大久保利通 総裁 西郷従道 副総裁 田中芳男 委員 關澤明清 委員 鹽田眞 委員 石田為武 委員 朝日升 委員 松尾伊兵衛 委員 宮城忠左衛門 委員 納富介次郎 委員 松尾儀助 委員 若井兼三郎 委員 中野留吉 委員 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル 委員	委員 大久保利通 総裁 西郷従道 副総裁 田中芳男 委員 關澤明清 委員 鹽田眞 委員 石田為武 委員 朝日升 委員 松尾伊兵衛 委員 宮城忠左衛門 委員 納富介次郎 委員 松尾儀助 委員 若井兼三郎 委員 中野留吉 委員 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル 委員	委員 大久保利通 総裁 西郷従道 副総裁 田中芳男 委員 關澤明清 委員 鹽田眞 委員 石田為武 委員 朝日升 委員 松尾伊兵衛 委員 宮城忠左衛門 委員 納富介次郎 委員 松尾儀助 委員 若井兼三郎 委員 中野留吉 委員 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル 委員	委員 大久保利通 総裁 西郷従道 副総裁 田中芳男 委員 關澤明清 委員 鹽田眞 委員 石田為武 委員 朝日升 委員 松尾伊兵衛 委員 宮城忠左衛門 委員 納富介次郎 委員 松尾儀助 委員 若井兼三郎 委員 中野留吉 委員 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル 委員
--	--	--	--	--

*米國博覧會報告書－第二－より

表5 米國費府博覧會渡航人名表

渡航人 田中芳男 關澤明清 鹽田眞 石田為武 朝日升 松尾伊兵衛 宮城忠左衛門 納富介次郎 松尾儀助 若井兼三郎 中野留吉 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル	渡航人 田中芳男 關澤明清 鹽田眞 石田為武 朝日升 松尾伊兵衛 宮城忠左衛門 納富介次郎 松尾儀助 若井兼三郎 中野留吉 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル	渡航人 田中芳男 關澤明清 鹽田眞 石田為武 朝日升 松尾伊兵衛 宮城忠左衛門 納富介次郎 松尾儀助 若井兼三郎 中野留吉 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル	渡航人 田中芳男 關澤明清 鹽田眞 石田為武 朝日升 松尾伊兵衛 宮城忠左衛門 納富介次郎 松尾儀助 若井兼三郎 中野留吉 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル	渡航人 田中芳男 關澤明清 鹽田眞 石田為武 朝日升 松尾伊兵衛 宮城忠左衛門 納富介次郎 松尾儀助 若井兼三郎 中野留吉 ドクトル・ゴットフレー・ワグネル
---	---	---	---	---

*米國博覧會報告書－第二－より

なお、ウィーン万国博覧会では大工として關口善助、フィラデルフィア万国博覧会では同じく大工職として關口善吉の名前がみられるが、同一人物かどうかの確認資料は得られていない。

また、渡航はしていないが、双方の万国博覧会関わった人として町田久成、中嶋仰山、そして、河原徳立がいた。更に、山高信離はウィーン万国博覧会では渡航して現地に赴き、フィラデルフィア万国博覧会では日本に残っている。

このように、双方の万国博覧会に亘って名前が見えるのは16名であり、その内の12名が両万国博覧会に赴いている。中でも田中芳男は1867年のパリ万国博覧会、ウィーン万国博覧会、そしてフィラデルフィア万国博覧会に続けて渡航した。こうした人々を中心に日本の万国博覧会への参加が推し進められていったと考えられる。

3. 起立工商会社の設立

起立工商会社は、ウィーン万国博覧会後展示した品々の購入希望の会社への対応のために、政府の貸与資金を基にして、民間人を起用して1874年設立された、いわば「政府の保護会社」であり、官立民営のエージェンシーと見るのが、最も実体に近いと言われている⁸⁾。この起立工商会社は国際的な博覧会参加のための政府の事業を代行し、そのための出品物の自主制作にも当たったという⁸⁾。この時、起立工商会社の社長に松尾儀助、副社長に若井兼三郎が民間人として起用されたのだった。両名ともウィーン万国博覧会に随行員として渡欧している。職務は「賣店賣捌」である（表3参照）。そして、フィラデルフィア万国博覧会では「出品人 起立工商會社」として明示され、両者の名前を渡航人名表に見ることが出来る（表5参照）。

フィラデルフィア万国博覧会の「米國費府博覽會報告書－第二－」の日本出品目録をみると、出品主起立工商会社の出品物が数々ある。その例を第二大区製造物の出品の中から示すと⁹⁾、日本墨、新古陶磁器類聚、新工髹漆器家具、古髹漆器類集、銀器、竹簾、肥前段通氈、綴錦、頸纏、麥稈製帽子各種、刺繡家什、玉石裝飾小品、玩弄裝飾用雜品、扇 团扇各種、鹿皮染紋革、筆見本、紙ノ類集四十八種、白冊五種、甲冑六領、弓八個、矢九十三本、揚弓具、竹器などがある。これは第二区の出品物だけであり、第三大区教育及び知学、第四大区美術、第六大区農業にも出品物はみられる。

イギリスのロンドンにあるヴィクトリア&アルバート美術館（旧称サウス・ケンジントン博物館）とエジンバラにあるスコットランド王立美術館（旧称エジンバラ科学芸術博物館）は、フィラデルフィア万国博覧会の出品物を購入し所蔵しているが、これらの出品物の売り主は、両美術館とも起立工商会社であることが判明している¹⁰⁾。特にヴィクトリア&アルバート美術館がフィラデルフィア万国博覧会の出品物を購入するにあたっては、館長のフィリップ・カンリフ・オーエンが佐野常民を通して行っており¹¹⁾、明記されていないが、ウィーン万国博覧会との関連が推測されるのである。

また、アメリカのボルティモアにあるウォルターズ美術館も、フィラデルフィア万国博覧会からの出品物を所蔵しているが、これらの出品物の購入にあたっては、Wakai Kanesaburou

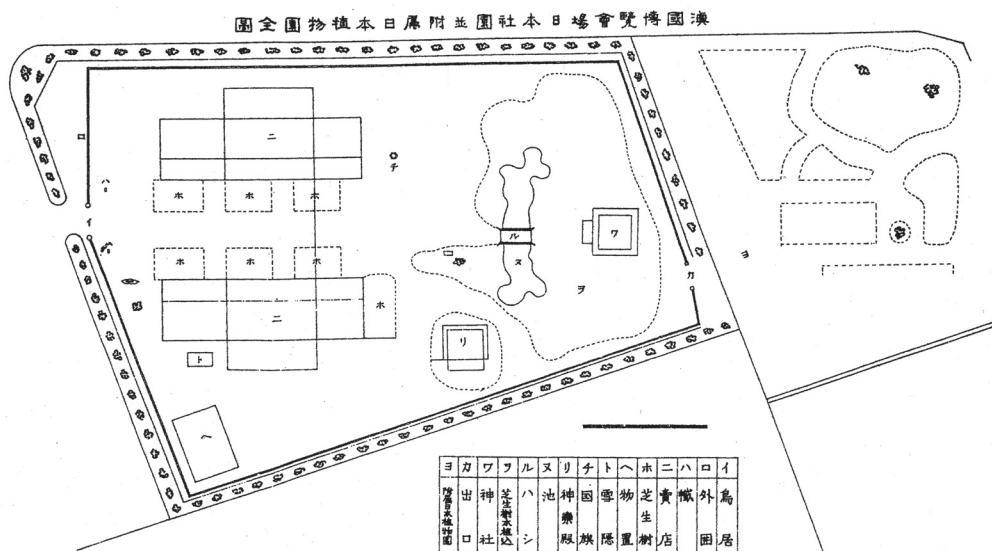
と Minoda Chojiro が関わっている¹²⁾。Wakai Kanesaburou とは若井兼三郎であり、若井は起立工商会社の副社長であったから、この美術館が所蔵する出品物も起立工商会社と関わりがあると言える。

4. 万国博覧会場内に建てられた日本建築

ウィーン万国博覧会にもフィラデルフィア万国博覧会にも、日本の建物がその会場内に建てられた。どちらの万国博覧会にも日本から職人が赴き日本人の手によって建てられている。そして、双方の日本建築ともに大工棟梁を務めたのは松尾伊兵衛であった。

ウィーン万国博覧会では図1に示すように、「鳥居」「売店」「神楽殿」「神社」が建てられた。これらの建物を建てるために、大工として 山添喜三郎、近藤半次郎、中野留吉、関口善助が、家根職として、小林市五郎、小林甚八が、経師職として堀江菊蔵が随行し現地に赴いている。そして、この建物の周囲の造園のために、植木職として、内山半右衛門、佐久間芳五郎、宮城忠左衛門が赴いている（表3参照）。開幕は5月1日であったが、この日までに神社と庭園を組み合わせた部分は完成しなかった。しかし、日本の大工達が日本建築を建設する様子はこの万国博覧会を訪れた人々の目を引いたのだった。「五日、オーストリア皇帝は皇后や貴族とともに日本館を見物し、庭園中に作られた神殿の前の橋の渡りぞめをされた。ところが日本の大工がカンナで木を削る様子が非常に珍しく眼に映ったようだ。西洋のカンナと削る方向もちがうし形もちろん異なっていたからであろう。ことに長いカンナ屑ができあがるのは、興味をひいたとみえ、女官たちはこれをひろって、ていねいにたたんで持ち帰ったほどであった。」¹³⁾という報告もある。図2は日本の建物が建てられた入口の鳥居から、園内を見通した図である。

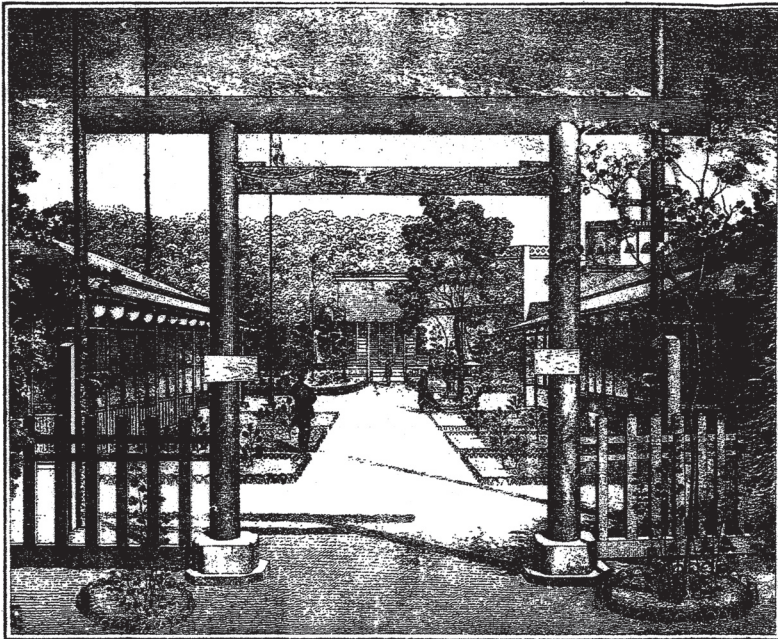
図1 澳國博覧會場日本社園並附属日本植物園全圖



* 澳國博覧會參同紀要一付録一より

図2 澳國博覽會場日本社園正面之真景

澳國博覽會場日本社園正面之真景



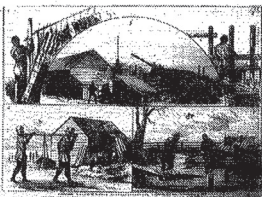
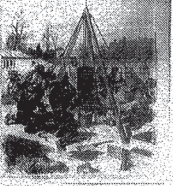
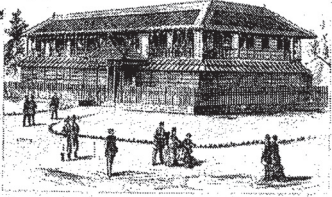
* 澳國博覽會參同紀要一付録一より

フィラデルフィア万国博覧会では「日本家屋」¹⁴⁾と「日本賣物店ノ建築」¹⁵⁾の二棟の建物が建てられた。この二棟の建物は別々の場所に建てられており、「日本家屋」は万国博覧会場の西端にあるジョージ・ヒルの麓で、イギリスの建物の近くに建てられた。「日本賣物店ノ建築」は本館（Main Building）を北西に外に出たところに建てられた。日本出品目録によると、「第七大區 園藝 此大區ニ附属スル物料ハ都テ日本賣店ノ周圍ニ排置シ以テ日本固有ノ園庭ヲ示セリ」¹⁶⁾とあり、この「日本賣物店ノ建築」の周圍に第七区の出品物で日本庭園を配置した。

ウィーン万国博覧会で開幕までに建物の完成が間に合わなかった反省からか、今度は大工職の熊本半兵衛、関口善吉、中野留吉、石井吉五郎、山下茂三郎、山田孫三、関根大五郎、内山春次、石黒元吉、左官職の藤野音次郎、瓦葺職の高木辰之助（表5参照）の11名が渡米している。大工職はウィーン万国博覧会の4名から9名へと大幅に増員しているのである。また、中野留吉はウィーン万国博覧会にも渡航していて、現地での建設については充分理解していたと思われる。造園については渡航者の名前は明記されていないが、事務官随行として宮城忠左衛門の名前がみえるので（表5参照）、この人を中心に造られたと考えられる。

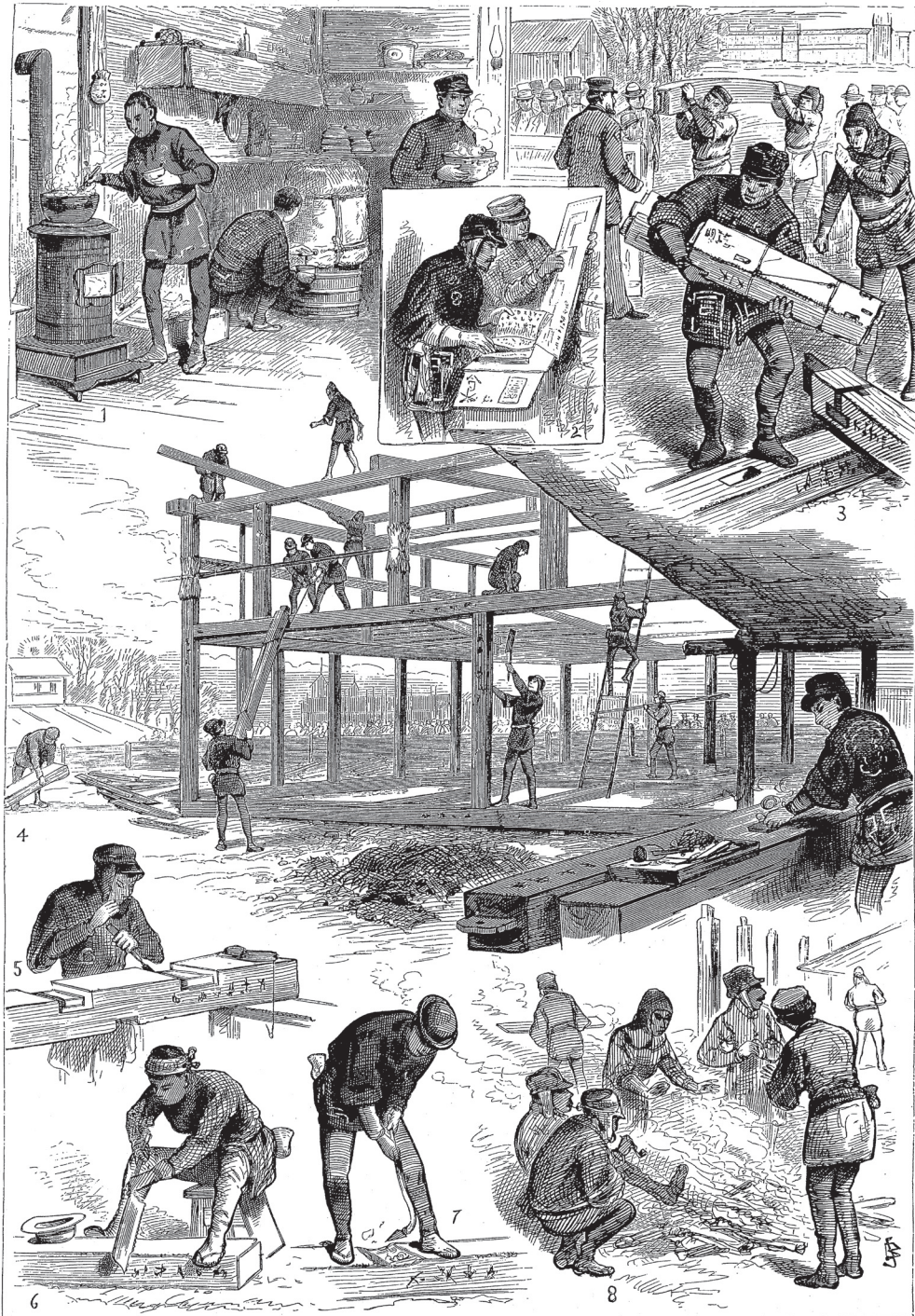
建設は1月下旬に始められて、5月10日の開催日までには二棟の日本建築は無事完成した。そして、これらの建物の建設の様子、見物に集まった群衆の様子は新聞で報道され多くの人々の関心を引いた。図3は当時発刊されていた日刊絵入り新聞 The Daily Graphics 誌、週刊絵

図3 絵入新聞三誌におけるフィラデルフィア万国博覧会の日本建築に関する挿絵一覧 (1876年)

掲載月日	日本賣物店ノ建築	不明・その他	日本家屋
2月3日		日本家屋の建設に従事する日本の職人達 ▶	
2月12日	作業場を建設する日本の大工達 ▶		
		日本の建物の基礎を据える日本の職人達 (1月25日) ▶	
2月26日		日本の道具とパイプ ▶	
		日本家屋 ▲	
3月11日	日本賣物店ノ建築の屋根仕上をする日本の職人達 ▼		
4月1日		日本の仮設宿舎の室内 ▲	
5月2日			▲ 日本の建物の建造
5月3日		日本のコミッショナーの宿舎 (日本家屋) ▶	
		日本賣物店ノ建築を建設する日本の職人達 ◀	
6月29日		日本の木材の搬手 ▲	
8月26日		日本家屋 ▶	
	◀ 日本賣物店ノ建築		

■■■■■はFrank Leslie's Illustrated Newspaper誌、////はHarper's Weekly誌、xxxxはThe Daily Graphics誌

図4 Frank Leslie's Illustrated Newspaper 誌 1876 年 2 月 26 日号



1. Japanese workmen preparing their meals. 2. The chief workman and his assistant consulting their books and charts. 3. Bringing joists and timber from Machinery Hall. 4. Erecting the Japanese dwelling-house. 5. Mortising.
6. Sawing. 7. Using the adze. 8. Around the fire.

ERECTION OF THE JAPANESE BUILDINGS ON THE CENTENNIAL GROUNDS, IN FAIRMOUNT PARK.

入り新聞 Frank Leslie's Illustrated Newspaper 誌、同じく週刊絵入り新聞 Harper's Weekly 誌が日本建築の建設について報道した挿絵を取上げて月日を追って一覧表にしたものである。これをみると二棟の日本建築がどのように建てられ、どのようにアメリカの人々の興味をひいたのかが分る。図4はこれらの挿絵のうち1876年2月26日の Frank Leslie's Illustrated Newspaper 誌を拡大して示したものである¹⁷⁾。そこに描かれているのは、1. 食事を準備している日本の職人たち、2. 本と図面を調べている職人の親方と彼の助手、3. 機械館から継ぎ手と木材を運搬する様子、4. 日本家屋の建設、5. 枿穴づくり、6. 鋸引き、7. 手斧使い、8. 焚き火を囲んでと説明があるように、建物の建設だけでなく、日本の職人達の一举手一動がすべて珍しく報道されたことが分る。また、同誌は3月11日号¹⁸⁾においても日本の職人達の仮宿舎を訪れ、その室内と職人達の日常生活を報道する記事を書いている。こうした報道についてもウィーン万国博覧会での経験から、大工棟梁松尾伊兵衛を始めとした日本の博覧会関係者は、目前に繰り広げられる建物の建設が、アメリカの人々の関心を日本へ惹きつける事前のパフォーマンスとして十分な効果があると計算していたのではないかと推測されるのである。

ウィーン万国博覧会の建物とその周囲の造られた庭園は、イギリスの商社アレクサンドル・パーク社に600ポンドで売却され、ロンドンに移築された¹⁹⁾。フィラデルフィア万国博覧会の日本建築はその後どのようなになったのか筆者の調査ではまだ確証は得られていない。

5. ニール号の沈没とフィラデルフィア万国博覧会での展示

ウィーン万国博覧会終了後、ヨーロッパを出航した後香港で積み換えられた、万国博覧会に展示され持ち帰られた出品物、万国博覧会で購入した物品、寄贈された物品、西欧で購入された器機類などを載せたフランス船ニール号が、横浜入港を目前にして、暴風雨のため伊豆沖で暗礁に乗り上げ座礁し沈没した。1874年（明治7年）3月20日夜のことである。この時積み込まれていた日本の荷物は、総数193箱であったという²⁰⁾。

これらの荷物の一部（68箱）は1年半後に海の底から引き揚げられた²¹⁾。海水に弱い品々は再使用できなかったが、漆器は海水に強く、付属の金属が腐食しただけで再び使用することができた。日本の漆器が堅牢であることを証明したのであった。

この時引き上げられた漆器が、フィラデルフィア万国博覧会に再び展示された。「米國費府博覧會報告書－第二－」の日本出品目録の中には次の記述²²⁾がある。

號外	出品主	内務省 博物館
髹漆見臺 凡百五十年前ノ製澳國博覧會ニ出陳シ載歸ノ中途		
豆州妻良沖ニテ郵船沈淪ス後一年半ヲ過キテ之ヲ		
取揚タリ黒漆金髹爛然奮ノ如ク些ノ損傷ナシ我邦漆器		
ノ堅牢能ク久キニ堪フルヲ證スルカ為メ今之ヲ出陳ス		

これを読むと、漆器の堅牢性を証明するために「髹漆見臺」をフィラデルフィア万国博覧会に展示したことが分かる。はからずもウィーン万国博覧会に出品された同じ出品物をアメリカ

の人々は見ることが出来たのである。

このニール号の沈没は、船荷の保険制度の認識もあまりない時代にあつて、海上保険をかけていなかったため、その保障については困難をきわめたと言われている。なぜなら、ウィーン万国博覧会に展示され日本各地から集められた貴重な収集品、西欧で購入され日本で展示されようとした品々が失われたからである。副総裁の佐野常民が表立った報告書の執筆などあまり残さず、田中芳男の方にこの面での多くの業績があるのは、このニール号事件の失敗があり、佐野があまり多くの言及を避けたからではないかと言われている²³⁾。

6. 技術伝習とフィラデルフィア万国博覧会での出品

ウィーン万国博覧会における直接の出品ではないが、この万国博覧会への参加を機会にヨーロッパ各国の先進工業技術を学ぶため伝習生を各地に送り込むことを派遣団は決定していた。この伝習生をヨーロッパ各地の送ることもウィーン万国博覧会参加の目的のひとつであった。しかし、明治政府はこの技術伝習を最初は認めなかった。派遣団の公金を貸し付けて自費留学という形で始められた技術伝習も、後には出品物の売却金 6000 円を支出することが認められ、官費になった。副総裁の佐野常民と同行していた御雇外国人ワグネルはこれらの技術伝習生を熱心に指導し世話を行ったという²⁴⁾。

この成果の一部は早くもフィラデルフィア万国博覧会に展示された。「米國費府博覧會報告書－第二－」の日本出品目録の中には次の記述がある。

第六十六號

出品主 勸業寮試験場

歐洲風油漆ヲ以テスリタル衣笥及ヒ粧臺 漆工清野三治、木工近藤
半次郎、曾テ澳國博覧會

事務官ニ隨行シ維納府ニ在テ彼ノ製作法ヲ

傳習スルコト四ヶ月ニシテ歸リ試製セシモノ²⁵⁾

號外

出品主 勸業寮試験場

護謨塗布 九品 清野三次製、澳國博覧會事務官ニ隨行シ閉會ノ後自費ニテ
木具皮革及紙ニ護謨ヲ塗抹スルノ業ヲ其製工ニ就テ傳習シ歸後
試製セ
ルモノ²⁶⁾

號外

出品主 勸業寮試験場

モザイク
石像眼見本 二枚 朝倉松五郎作澳國博覧會ニ玉石細工ノ出
品人ト為リテ渡航シ閉場後伊太利國ニ派遣シモ
サイク製作ヲ傳習セシメ歸
來試ニ創製スル所ノモノ²⁷⁾

これらの出品物は、いずれもウィーン万国博覧会に随行して渡航した後、ヨーロッパ各地で技術伝習に務め、帰国して試作したものと記述している。

漆工清野三治は、「澳國博覧會參同記要－下篇 技術傳習－」の中に「斎藤正三郎改 清野三治」²⁸⁾と記述されていることから、旧姓は斎藤正三郎と名乗っていたことがわかる。「澳國博覧會派遣副總裁書記官并隨行員職務分担任表」の中に「蒔絵職 斎藤正三郎」の名前を確認することが出来る（表2参照）。木工近藤半次郎は「澳國博覧會派遣副總裁書記官事務官并隨行員職務分任人員表」の中の「大工 近藤半次郎」と掲載されている人物と考えられる（表3参照）。また、清野三次は「澳國博覧會派遣副總裁書記官事務官并隨行員職務分任人員表」の中に名前を見つけることが出来ないが、おそらく清野三治と清野三次は同一人物ではないかと推測される。朝倉松五郎は「澳國博覧會派遣副總裁書記官事務官并隨行員職務分任人員表」の中に「玉工 朝倉松五郎」としてその名を確認出来る（表3参照）。

ここに掲げられた人々は、フィラデルフィア万国博覧会に赴くことはなかったが、ウィーン万国博覧会を機会にヨーロッパで修めた技術により出品物を製作して、フィラデルフィア万国博覧会で展示したのであった。二つの万国博覧会の間にあった期間はわずか2年間ということを考えると、技術習得に対する熱意が伝わってくるようである。

7. まとめ

「澳國博覧會派遣副總裁書記官并隨行員職務分担任表」「澳國博覧會隨行御雇外國職務分任人員表」によると、ウィーン万国博覧会に赴いた人は、御雇外国人を含めて72名である。そして、フィラデルフィア万国博覧会に赴いた人は、「米國博覧會渡航人名表」によると同様に御雇外国人を含めて90名である。そして、両方の万国博覧会に赴いた人は12名おり、御雇外国人のドクトル・ゴットフレ・ワグネルは二つの万国博覧会に随行している。この人数を見ただけで、ウィーン万国博覧会の経験を踏まえて、より多くの人々がフィラデルフィア万国博覧会に赴いたといえるであろう。但し、フィラデルフィア万国博覧会では、ウィーン万国博覧会の肩書きにはなかった「手代」として赴いた人が26名いる。この万国博覧会では、一部の出品主が次第に商社的役割を果たしつつあったといえるかもしれない。

「起立工商会社」は、財政上の困難から1891年（明治24年）に廃業した。しかし、それまでの活動には目を見張るものがあった。日本の文化が世界に広がる推進役を果たし、美術工芸の輸出が促され、国内の産業を発展させることに少なからず寄与した。当時欧米で起こっていたジャポニスムの隆盛を文化的物質的側面から支えたと言える。

ウィーン万国博覧会の出品物は、ワグネルの助言を入れて、「日本的な精巧な美術工芸品を中心として陳列することが得策」²⁹⁾とされ、「未熟な機械製品よりも、純粋な手工業製品の方がより魅力的であり、外人に日本の深い印象を残すことになる。」²⁹⁾とされた。この傾向は、フィラデルフィア万国博覧会でも受け継がれていたと思われる。出品物の分類で第五大区機械には出品物はなく³⁰⁾、今日に残る日本の出品物の写真は美術工芸品が中心である。

また、ウィーン万国博覧会を機会にヨーロッパ各地で行われた技術伝習の結果、フィラデル

フィア万国博覧会に出品された出品物も機械による大量生産品ではなく、「試製セシモノ」「試製セルモノ」「試ニ創製スル所ノモノ」の言葉が示すように手工芸的な試製品のようなものである。

二つの万国博覧会の会場で、日本の建築を欧米の人々の目前で建てた日本の大工達は、欧米の人々に西欧とは違った文化を持つ国の建物について関心を呼び起こしたであろう。また、建物だけでなく、彼らの日常生活から使用する道具、仕草、すべての立居・振舞いまで興味をもって見詰められたようである。「日本の住宅に関する一種の人類学的研究」³¹⁾といわれるエドワード・S・モース著の「日本のすまい・内と外」(Japanese Homes and Their Surroundings)が欧米で広く読み継がれたと言われる背景には、このような現実に接した日本文化への関心があったからではないかと思われる。

最後に、ニール号の沈没は、図らずも日本の漆器の堅牢さを証明する結果となり、ウィーン万国博覧会に展示された出品物がフィラデルフィア万国博覧会にも展示されたが、次のような事実もまた日本にもたらされた。「ニール号の沈没により、日本の工芸の手本とすべく 1873 年ウィーン万博で蒐集された品の多くが失われた。これを知ったサウスケンジントン博物館（現在のヴィクトリア&アルバート美術館）の館長フィリッツ・オーエン³²⁾の呼びかけにより、陶磁、ガラス、金工、染織などのヨーロッパ工芸 315 点が日本に寄贈された。」³³⁾ この寄贈品を 1876 年に日本に届けたのは、イギリスのデザイナー、クリストファー・ドレッサー（1834 - 1904）であった。ドレッサーはフィラデルフィア万国博覧会を訪れた後、来日している³⁴⁾。

こうしてみると、ウィーン万国博覧会とフィラデルフィア万国博覧会が開催されたこの期間の日本とヨーロッパの美術工芸の交流にも深いものがあったと考えられるのである。

註

- 1) この表は「ジャポニスム入門」巻末の年表（ジャポニスム学会編 思文閣出版 年表 p. 14 - p. 27 2000）から抜粋して作成したものである。1878 年のパリ万国博覧会については日本の出品の記述がなかったので、「図説万国博覧会史」の巻末年表（吉田光邦編 思文閣出版 p. 191 1985）から抜粋掲載した。
- 2) 大島清次 ジャポニスム 美術公論者 p. 59 1980
- 3) [註 2] 前掲書 p. 49
- 4) 田中芳男・平山成信編輯 澳國博覧會参同記要 - 附録 原本・国立国会図書館所蔵 p. 4 - p. 11 1887（復刻 フジミ書房 1998）
- 5) 角山幸洋 ウィーン万国博覧会の研究 関西大学出版部 p. 89 - p. 118 2000
- 6) 米國博覧會事務局 米國博覧會報告書 - 第二 p. 1 - p. 5 原本・国立国会図書館所蔵 1876（復刻 フジミ書房 1998）
- 7) [註 6] 前掲書 p. 28 - p. 32
- 8) 瀬木慎一 林忠正と三人の重要人物（林忠正シンポジウム実行委員会編 林忠正 - ジャ

- ポニスムと文化交流 ブリュッケ p.104 - p.105 2007)
- 9) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.6 - p.73
- 10) 坂本久子 フィラデルフィア万国博覧会の日本の出品物 - 英国の二つの美術館との関連
日本デザイン学会誌 - デザイン学研究第46回研究発表大会概要集 p.194 - p.195 1999
- 11) Anna Jackson Imagining Japan: The Victorian Perception and Acquisition of Japanese
Culture Journal of Design History Vol.5 No.4 p.245 - p.256 1992
- 12) 坂本久子 ウォルターズ美術館所蔵のフィラデルフィア万国博覧会における日本の出品物
の概要 近畿大学九州短期大学研究紀要 第36号 p.12 - p.14 2006
- 13) 吉田光邦 万国博覧会 - 技術文明史的に 日本放送出版協会 p.80 - p.81 1970
- 14) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.86
- 15) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.86 - p.87
- 16) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.151
- 17) Frank Leslie's Illustrated Newspaper 誌 1876年2月26日号、P.404
- 18) [註17] 前掲書 1876年3月11日号、P.6
- 19) [註5] 前掲書 p.131
- 20) [註5] 前掲書 p.209
- 21) 東京国立博物館・大阪市立美術館・名古屋市博物館・NHK・NHKプロモーション・日
本経済新聞社 世紀の祭典万国博覧会の美術、NHK・NHKプロモーション・日本経済
新聞社、p.28 2004
- 22) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.34
- 23) [註5] 前掲書 p.234
- 24) [註13] 前掲書 p.83 - p.84
- 25) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.26
- 26) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.40
- 27) [註6] 前掲書 日本出品区分目録 p.114
- 28) 田中芳男・平山成信編輯 澳國博覧會参同記要 - 下篇 技術傳習 原本・国立国会図書館
所蔵 p.22 1887 (復刻 フジミ書房 1998)
- 29) [註13] 前掲書 p.78
- 30) 坂本久子 川上秀人 松岡高弘 フィラデルフィア万国博覧会本館における日本の出品
物と会場構成 - 写真からみた検証的研究 日本デザイン学会 デザイン学研究 Vol.45
No.3 p.54 - p.55 1998
- 31) エドワード・S・モース、上田篤他訳 日本のすまい・内と外 鹿島出版会 p.333 1980
- 32) Philip Cunliffe-Owen のことと思われる。
- 33) [註21] 前掲書 p.30
- 34) 佐藤秀彦 ドクトル・ドレッセル博士が日本に残したもの (「クリストファー・ドレッサーと
日本」展カタログ 「クリストファー・ドレッサーと日本」展カタログ委員会 p.46 2002